

「困っている人に無償で食品を届ける」「食品廃棄物を削減する」。一般的にフードバンクを立ち上げる目的はこの2つだが、なかには独自の目的を掲げるところもある。2008年4月活動を始めた特定非営利活動法人(NPO法人)「あいあいねっと」(広島市安佐北区)もその一つ。

「フードバンクを核に、高齢者が安心して暮らせるまちづくりを進めたかった」。あいあいねっと理事長の原田佳子さん(57)は強調する。域内にある医院で長年、管理栄養士として患者の栄養指導に当たり、金銭的理由から栄養面より安さを優先させる高齢者を数多く見てきた。「生活に困る高齢者をフードバンクで救えないかと考えた」。うようにした」

⑤ 勤めながらのフードバンク運営だけに事務所を開けるのは火曜日と金曜日。この2日間にボランティアに企業などから食品を集めてもらい、必要とする施設から事務所に取りに来てもらう

週に2日限りとはいっても活動は順調だ。不定期も入れると24の食品メーカーや生活協同組合などから毎月約1トの野菜や缶詰などを譲り受け、17の障害者作業所や母子支援施設などに

フードバンク事情



事務所内のレストランで食事ができるのを待つグループ客ら

高齢者の心も満たす

渡している。「昼食の一部や子どもたちのおやつに使われている」という。

一方、念願の高齢者向け事業も徐々に具体化させている。09年1月に家事や草取りの代行など高齢者の身の回りの世話をする「まごの手サービス」(1時間600円)をスタート。昨年10月には事務所内にレストランをオープンさせた。

事務所を開ける日の午前11時から午後2時まで、ボランティアの主婦らが調理した特製うどん(280円)やおむすび(70円と80円)、総菜(50円)を提供する。無償で譲り受けた食材を使うだけに「すべての企業から了解を得た」。

1日に訪れる客は20〜40人。「作るのが面倒という近所のお年寄りや主婦グループの利用が多い」といい、独り暮らしのお年寄りが孤独感を和らげることもつながっているようだ。

「いずれは高齢者への配食サービスも行いたい」と語るが、悩みは運営資金の確保。家賃など経費が月約10万円かかり、会員からの会費や企業からの寄付で何とかやりくりしている。

こうした状況を打開しようと近く、食品メーカーと協力して開発したあいあいブランドのドレッシングソースを売り出す。原田さんは「これでボランティアの車のガソリン代くらい出せるようにしたい」と話している。

広角鋭角